

【第1部】基調講演 田村一行 (大駱駝艦／舞踏家・振付家)
私を踊りへと誘うもの～『舞踏風土記シリーズ』の創作



田村一行氏

(写真左) 撮影：
小林直博(鶴と亀)

＜プロフィール＞

1998年大駱駝艦入艦、磨赤兒に師事。以降大駱駝艦全作品に出演。2002年『雑踏のリベルタン』を発表。同作品により第34回舞踊批評家協会新人賞受賞。2008年、文化庁新進芸術家海外留学制度によりフランスへ留学。2022年『舞踏 天狗藝術論』を発表。同作品により令和4年度(第73回)芸術選奨舞踊部門文部科学大臣新人賞受賞。地域の文化や風土を題材とした作品の創作にも意欲的に挑み、独自の作品を発表し続けている。また、子供から高齢者まで幅広い対象者への舞踏ワークショップを各地で展開し、好評を得ている。2011年より地域創造「公共ホール現代ダンス活性化事業」登録アーティスト。

田村一行氏：初めまして、『大駱駝艦』という舞踏カンパニーに所属している田村一行と申します。本日はよろしくお願ひ致します。

大駱駝艦のように身体を白く塗って踊る踊りは一般的に『舞踏』と呼ばれています。でももちろん白塗りが絶対というわけではありませんし、そのような見た目よりもっと重要な部分が他にもありますので、今日はその辺のことも含めて話しを進めていければと考えています。『舞踏』は1959年に秋田県出身の土方巽さんという舞踏家が行なった『禁色』という作品が始まりとされています。僕の師匠、大駱駝艦主宰の磨赤兒は唐十郎さんと芝居をやりながらこの土方さんから踊りを学び、1972年に大駱駝艦を旗揚げしました。今年(2022年)でちょうど50周年を迎え、7月には創立50周年公演を行ないます。今まさにその稽古の真っ最中です。

それではまず実際に、大駱駝艦の舞台がどんなもので、どんな踊りを踊っているのかを少し見ていただきたいと思います。

舞踏とは ー農民の蟹股の中に宇宙があるー

少しだけ土方さんの話しもさせていただきますが、僕は直接お会いしたことがあるわけではないので、磨さんはじめ親交があった方々からお聞きした話しや資料が情報源なのに加え、自分の妄想も入り込んでいますがご了承ください。

土方さんはモダンダンスをやっていた時「なんでこんなタイトスを履いて踊るのだろう」と疑問を持ったというんですね。そこには日本人特有の蟹股とか色々な要素があったのだと思います。それで自分のやりたい表現とは何かを考えた時、自分の生まれ育った秋田の風景がまず思い浮かんだんです。そこには田植えをする農民の方が、例えばこう背中を丸めながら（ここより田村氏が舞台中央に出て自身で農民の動作を表現。背を丸めて田植えをし、片手で額の汗を拭う動作をしながら）「暑いなあ…」とか、こういう動作やしぐさをする。これってすごい「踊り」ですよ。そしてその風景を舞台作品にできないかと考えたのだと思います。土方さんの作品で、客席の中に花道が通っていて、お客さんは下からその花道を見上げてそこに行きかう人たちを眺めるというような作品があったらいいのですが、それは恐らく土方さん自身が子供の頃に見た風景なんです。どういうことかという、秋田の方では「いづめっこ」とか「えづめっこ」とか呼ぶらしいですが、昔、東北では親が農作業する時、子供はその籠に入れられて畑とかの脇にポーンと置かれる。そこに入れられた赤ちゃんはキョロキョロとまわりを見たりする。そういう所から見上げる子供の視線、そこから見た大人達。馬とか牛とかも通るかもしれないですし、ひょっとすると花嫁行列や葬列が通ることもあるかもしれない。子供から見た世界、それはある意味摩訶不思議な世界ですよ。色々な景色や物語がそこにはありそうです。そういうふうにご郷の風景、自分の原風景をモチーフに舞台を創作していくんです。

磨さんと言うと、幼少の頃から奈良県の三輪山（奈良県北部にある奈良盆地の南東部の山。桜井市）のすぐ麓で育ちました。去年の奈良公演の時に磨さんと一緒にそこへ行ってきたんですけど、もう本当に三輪山の鳥居の内なんです。そこで幼少時代を過ごして、遊び場が三輪山だったってすご過ぎますよね。だからあのような神がかった踊りを踊るのだとも納得してしまうんですが、本日のテーマが「郷土の記憶を舞台化する」ということで、この後本題に入っていきますが、色々な所に行って作品を作らせていただく時に資料もたくさん集めるのですが、色んな題材が三輪山と関係していたりするんです。日本の中でも特に特別な、神秘の中心みたいなものを感じさせる場所で、磨さんの踊りにはそんな風景を常に纏っていると感ずることが出来ます。

（スクリーンに『大駱駝艦 天賦典式』の表記、舞台作品を投影しながら）他にも実際に「郷土の記憶を舞台化」した作品もいっぱい見ていただきたいので、（大駱駝艦の舞台作品の映像投影は）この辺で止めちゃいます。すみません。

本題に入る前にもう少しだけ自分が考える踊りについて話させてください。西洋のダンスは、ジャンプ、ステップ、ターンが三大要素と言われています。西洋では神様が天にいるという考えもあって、美しく高く跳ぶとかそういうのが多く見られます。ですが日本人の感覚だと、神様って其処彼処にいますよね。地面とか、その辺の草木や岩や山とか、色んな所に普通にいます。だからと決めつけると反論もありそうですが、舞踏ではその三大要素が特別に重要視されるようなことはありません。それで重力に反発して飛び上がるわけではなく、むしろ重力を纏って地面に向かってかがんだりとか。「農民の蟹股の中に宇宙がある」と言ったりしますが、中腰になった時に作られた股の間、こういう空間をすごく大事にします。例えば病床に臥せる女性でもいいですし、百年・二百年という長い時間を背負った老人の曲がった腰でもいいですけど、それらだって美しいです。うちの親父は孫を連れていくと、歩くこと自体がメチャクチャ大変なはずなのに歩行器を使って（田村氏が父上の歩く真似をしながら）「来たねえ」って孫の所に歩み寄って行くんです。その時「親父、良い踊りしてるな」っていつも思っていました。簡単には行けないけど行きたいという強い思いがあって、一歩一歩を丁寧に踏み出す身体にものすごい密度がある。ジャンプもス

テップもターンもそこにはないけども、身体は何かを表現させられている。その辺に舞踏の面白さ、大駱駝艦の踊りの秘密が隠されているように感じています。

空っぽの器に何かを入れて何者かになりたい、だから踊る

大駱駝艦の舞踏の特徴の一つであるとも言えるのですが、僕らが踊る時の身体が一番基本的な状態として、「人間の身体は空っぽなんだ」という考えがあります。そもそも僕なんて何者でもないんです。空っぽで何にもない。だからこそ空っぽの器に何かを入れて何者かになるんです。

僕なんて本当につまらない人間です。でもここが重要なんですが、僕はつまらない人間でも周りにいる人達がメチャクチャ面白いんです。その人達のお陰で自分は面白くられる。今の自分がこうして踊りのことを考えられるのは、師匠である磨さんが、僕が弟子入りしてからのこの25年という年月をかけて今の田村一行という人間の踊りの価値観を作ってくださったからです。空っぽに何を入れるかということがとても重要で、人間は外側の色々な要因によって作られている。そしてそこから外側の色々な要因によって動かされ、踊らされていくわけです。

例えば先程僕の名前は田村一行（いっこう）だと言いましたが、本名は一行（かずゆき）なんです。でも、それって皆さんにとってはどちらでもいいことですよ。僕はこの前36歳になりました。いや、本当は46歳です。でも別にこれも皆さんにとってどうでもいいですよ。僕、こう見えてパリで生まれて15歳までフランスに住んでいたんです。嘘ですね。東京で生まれて東京で育ちました。そういう風に、「自己紹介してください」という時にまず名前を言ったりしますけど、名前って自分の本質の何も説明できているわけではない。「いっこう」でも「かずゆき」でもどっちでもいい。年齢だってあなたが三十だろうが五十だろうが関係ない。「あなたは何者ですか」という質問に、「東京生まれの東京育ちで…」「出身はどうでもいいです、あなたは何者なんですか」、「好きな食べ物はらっきょうで…」「らっきょうはどうでもいいんです」、「父親の仕事は…」「父親は関係ありません。あなたは何者ですか」となってくると、そこで気付くと思うのですが、呼び名とか生きてきた時間とか職業とか、親のこと生まれた場所のこと、あとは好きなものとか…、自分は自分のことを周りのことでしか説明できないんです。それは時代であったり、環境であったり、文化や言語であったり、そういったものが人間を作っているということであるとも言えます。縄文時代に生まれていたらその時の価値観を持って生きていただろうし、全く文化の違う外国で生まれ育っていれば、今当然だと思っている常識も全然違っているのだと思います。疫病が流行る前は、こんなに長い間マスクを着けるなんて思いもしませんでしたし、争いごとが起こったら、大切なものを守るために明日武器を持たないといけなかも知れません。それくらい価値観や自分が持っている常識というのは周りのものに作られていて、危うくて、人間は常に何かにも踊らされている。こう考えると人間はやはり空っぽで、周りのものが今の自分を作っているんだということに納得できます。磨さんの考え、大駱駝艦のメソッドの中でも、この「まずは空っぽになりなさい」というのがとても重要で、そして、この発想こそが「郷土の記憶を舞台化する」という時に、とても重要な基本姿勢となるんです。

身体が感動して、その感動が創作の第一歩となる

ここ数年色々な場所に呼んでいただいて、その場所をモチーフに作品を作らせていただくのですが、その時僕はまず空っぽなんです。「一行さん、ここ面白いから見に行きましょう」とか「ここにこんな話があるんです」、「こんな人がいたんですよ」ということに、「はい、行って見ましょ

う！」と付いていくと、「うあっ、すげー！」って大抵はまず単純に感動して、その感動が創作の第一歩となるんです。空っぽの自分に何が入ってくるか。空っぽであればあるほど色んなものが入ってくる。だから頭があまり良くちゃダメなんですよ、舞踏家は。よく言えば世界をはじめて見る子供のような感覚を持ち続けられるか。「上手に踊ろう」とか「かっこつけてやろう」とか「感動させよう」とか、そういう邪念があっては中々良い踊りにならないのと同じです。まずは空っぽであるということがとても大切なんだということを、今日の話しの前提としてご理解いただければと思います。

古くからの伝統、文化からもらっているもの

実際に行なう基礎稽古ですが、まずはポーッとリラックスして立たされてみましょう。脳みそはボヤンとしていて何も考えない。目は開いているけど何も見ていません。身体は水の中に入っているような感覚で、脇の下とか、足と足の間とか、指と指の間とかにも水があります。緩やかに、その中を漂っています。空からもう一人の自分が今ここにいる自分を見つめているように、自分の身体と自分の意識との間に距離を置いてみます。そのような状態で例えば「寒い」とイメージしてみましょう。(ゆっくり震えるように両手を中央に持っていきながら) そうすると身体が勝手に寒さに動かされていきます。ここで大事なのは「どうやったら寒さを表現できるか」とか「上手に寒さを表現してやろう」ではありません。身体も頭も空っぽにして寒さに動かされていくことが重要です。そのように身体と向き合う行為自体が踊りになるんです。それでも生まれ育った環境や時代によって寒さへの感覚は人それぞれ異なります。「寒い」が「痛い」になったり、そこでその人ならではの寒さが出来上がるわけです。でも(「暑い暑い」というようなしぐさで)「寒い寒い」となる人は世界中探してもあまりいないですよ。作為的に行なうと嘘くさい身体になってしまいます。他にも例えば「眩しい」だと、(片手を目の上に掲げながら) だいたいこういう風に身体が動かされるな、とか想像できますよね。

僕は外国の方を対象にワークショップをする時、必ず「雷」の話しをすることにしています。「雷が鳴ったらどうなりますか」というと、(片膝をついて両手を合わせ天を拝んだり、胸の前で十字を何度も切りながら)「オー、ソーリー」とかやる方もいますし、頭を抱えて震える方とか色々な方がいます。でも海外にこうする人はいません。(おへそを両手で隠すしぐさ) そこで僕は、「日本の子供達は全員こうするんだよ」と言うんです。そうすると「なんで!？」ってなりますよね。「雷様がおへそを食べるから、まずおへそを隠すんです」と言うのと皆「オーッ！」となる。これは分かりやすい例ですが、他にも咄嗟に出るしぐさや普段身につけている言葉とか、たくさんの方が環境や時代によって作られていて、無意識に世界の様々な影響を受けているんです。

古くからの伝統や文化からもたくさんもらっているものがあるって、例えば日本人のノックは2回だけどアメリカ人は3回だとか。1回だけのノックは少し薄気味悪い印象がありますし、「もしもし」と呼ばれたら返事をしていいけど、「もし」の1回だったら返事をしちゃいけない。少し話しがそれるかも知れませんが、「つまらぬものですが」と言いますが、あれもまじないですね。「これすごく良いものなんで差し上げます」と言うのと「なにになに良いものだった?」と悪いものがいっぱい集まってきちゃう。だからわざと「つまらないものです」と卑下するんです。赤ん坊が生まれた時も「うわ、汚いものが生まれたね」と言った方が良いと聞いたことがあります。「可愛い子が生まれたね」と言うのと、やはり悪いものが集まってきちゃう。あと日本だと絶対にお箸とお箸でものをつかんだりしませんよね。他にも「ご飯をよそう時は1回でなく2回でよそう」とか、

「洗濯物はさした方から抜く」「葬式の行きと帰りは違う道を通る」「夜に爪を切らない」とか、ほとんど無意識のレベルで身に染みついている感覚もたくさんあって、そういう価値観を全て含んで自分の身体というものは作られています。これは日本と外国とで比べれば違いはとても明確になるんですが、日本国内だけを見てもたくさんあることなんです。

そういうことを全部含めてその場所に行って何と出会い、それがどんな風に自分を踊らせてくれるのか。「空っぽになって踊らされる」という大駱駝艦の踊りの考えと、「郷土の記憶に踊らされる」という行為は驚くほど密接に関係していて、自分の踊りを作る行為にあてはまるんです。そうした考えの上で、ここからは実際の作品をいくつか例に挙げながらお話を進めさせていただきたいと思います。

昔から伝わるものが、いまも生きている

僕は大駱駝艦に所属して今年(2022年)で約25年になりますが、10年くらい前から、色々な土地を題材にした作品の創作をさせていただいています。今回の講義のために、自分が作ってきた作品を見返してみたのですが、自分の作品の内、だいたい30作品くらいが「郷土の記憶を舞台化する」という言葉にあてはめることができそうです。じゃあその時、どのように題材と向き合っていくのかということが重要なポイントになると思うのですが、「こうすれば作品になります」と簡単に説明できるメソッドはありません。結局は一つ一つの場所や作品によって題材へのアプローチの仕方は異なってくるんです。それでも明らかに自分の中で何かが変わり、大きな意味を持つ作品というのがいくつかありまして、最初に、2014年に青森県八戸市で創作した『おじょう藤九郎(とうくろう)さま』について話させていただきます。この作品は青森県の八戸地方に伝わる『えんぶり』(注1)という国の重要無形民俗文化財になっている郷土芸能があるんですけど、それを題材にした作品です。

(注1)『八戸えんぶり』は1979年に国の重要無形民俗文化財に指定。

－以下4点、補足説明として「NPO法人日本伝統文化振興機構」のWebサイトより引用。

- ・八戸地方を代表する民俗芸能で、青森冬の三大まつり、みちのく五大雪まつりに数えられています。えんぶりは、その年の豊作を祈願するための舞で、太夫と呼ばれる舞手が馬の頭を象った華やかな烏帽子を被り、頭を大きく振る独特の舞が大きな特徴です。その舞は、稲作の一連の動作である、種まきや田植えなどの動作を表現したものです。
- ・「えんぶり」は組単位で行われ、「太夫」と呼ばれる舞い手が3人あるいは5人と、笛、太鼓、手平鉦(てびらがね)、歌手など総勢20～30人で構成されています。【親方】組の代表格。組を統率する。【太夫(たゆう)】えんぶりの主役、えんぶりの舞い手たちのことである。三人もしくは五人でなり、先頭にたつ太夫を「藤九郎」と呼ぶ。なぜ藤九郎と呼ぶのかは起源同様様々な説がある。最後の太夫をクロドメと呼び、それ以外の太夫は中の太夫と呼ばれる。
- ・えんぶりを舞うことを「えんぶり摺(す)り」「えんぶりを摺(す)る」と言うのですが、これは「えぶり」と呼ばれる農具を使って田んぼの土を平らにならすことを摺る(する)と言うことから、農具を持って舞うえんぶりのことも「摺る」と言うようになったのです。太夫は馬の頭をかたどった烏帽子(えぼし)をかぶり、黒いはっぴのようなものを羽織り、農具を模した棒を手に、足にはワラでできたツマゴを履く。その足で大地をしっかりと踏みしめて、頭を振る。時には中腰になって地面すれすれまで頭を振り、一心不乱に舞う。「えんぶり」という言葉は動詞の「イブリ(揺り)」に通じ、大地を揺さぶる、揺さぶり起こす、かき混ぜる、等の意味がこめられているのです。その時、太夫の烏帽子には神が降臨すると信じられていました。

・えんぶり摺りの一連の流れは次のとおり、種まきから稲刈りまでの稲作を、一つのストーリーとして表現したものです。うち「摺りはじめ」「中の摺り」「摺り納め」の三演目が主な神事儀礼的な演技として行われます。最後に、大事な畦(クロ)から水が漏れないようにと、呪文の言葉を唱える「畦留め(クロドメ)」で、えんぶりは終わるのです。

正確な数はわからないのですが、各地区ごとにえんぶり組があって、組によってもそれぞれに少しずつやっている内容が違ってきます。2月に一日だけ『一斉ずり』というのがあって、その時は八戸の中心街に一同が集まって、まちなかを摺って行進するんです(注2)が、その光景はものすごい迫力でした。

(注2)「(市)中心街に集結した30数組のえんぶり組による一斉の舞は圧巻で、数あるえんぶり行事の中でも最大の見どころの一つとなってい」(る)ー「一般財団法人V I S I Tはちのへ」のWebサイトより引用。

八戸の方から「豊作を願う踊りがあるんですけど、それを題材に作品を作ってみませんか」とお話をいただきました。それで八戸市南郷の荒谷にある、荒谷えんぶり組に行くことになりました。実際に行ってみて深く肌で感じることになるんですが、えんぶりというのはその地区の人達がずっと守っているものであって、部外者が突然現われて「はい、教えてください」と言うものではないですし、軽々しく「僕たちにも踊らせてください」と言うべきものでもないんです。そこにはその土地に生きる人達が本当に大切に守り続けてきた祈りや心があるんです。にもかかわらず、荒谷えんぶり組の親方が僕らのやっていることに興味を持ってくださって、「面白いじゃないか」と言ってくださったんです。そしていくつかの踊りを教えてもらうことになります。最初、「なんでこんな余所者に踊らせるんだ」と思った方も絶対いたと思うんです。と言うか、思わない方がおかしいというほどのものなんです。その後打ち解ける可能性があったとしても、最初の段階で話しが進まなければもうそこで話しは終わってしまうわけですから、その時は本当に嬉しかったです。その嬉しさと共に「じゃあ自分はこのような物凄いモノをどのように作品にまとめるのか」という苦悶の時間も始まるのですが…。実際に踊りを習うだけでも貴重なことなんですが、とても神聖なものである烏帽子を被らせていただいたりもして、二度とできないような体験もさせていただきました。えんぶりの稽古は夜に行なわれて、1時間くらい身体を動かした後「じゃあお酒でも」となります。それがまた大切な時間で、そういう時、親方は荒谷に伝わるえんぶりの色んな伝承も聞かせてくださいましたので、僕はいつもノートを広げながらお酒を飲んでいました。例えば、おじょう藤九郎という人が初めてえんぶりをお殿さまの前で踊って献上したとか、その地区にいた7人の踊りの上手い親方たちが、争いごとの責任を取ってみんな自害したとか、そういうお話を聞かせてくださるんです。この話しには続きがあって、その自害した時に銀杏の木の下に烏帽子を7つ埋めたという話しがあるのですが、近年実際に銀杏の木の下から烏帽子が見つかったらしく、過去から語り続けられてきた物語の世界に足を踏み入れたような感覚を覚えました。他にも50年以上も前の、何代も前の祖先の方が唄っているというえんぶりの音源をいただいたりもしました。その時はその声を通して、会う事もないはるか未来の子孫に向けられた、遠い祖先の五穀豊穡の祈りが目の前に現われて、過去から現代、そして未来へと繋げられていく人間の愛情の尊さに胸が熱くなりました。そのような事柄を可能な限り組み込んで『おじょう藤九郎さま』を構成しました。

その何年後かに、別の企画で映画を製作することになってまた荒谷を訪れるのですが、その時は『おじょう藤九郎さま』の時とは親方が代わっていて、新しい親方とも色々とお話しをさせていただきました。その親方は「7人の自害した親方や、埋められた烏帽子という昔の話しも分か

るんだけど」という上で、「今」というものをとても大事になさっていると感じたのを覚えています。物語になりやすいような所をついつい注目してしまいますが、そもそもえんぶりの中にはもっと根源的に大切なものがあるのだと。今実際に関わっている方々の思いときちんと向き合わなければ「都合よくだけ題材と付き合う」という、僕が最も避けたいことをやってしまうことになります。えんぶりは昔から続けられてきた祈りであり、今生きている方々の生活、人生と密着しているものであって、それは子孫につなげていく祈りでもある。そういう思いを余所者が軽々しく踏みにじってはいけないし、そこにある大切な思いは作品の中でも最も大切に作る部分でなければいけないのだと、強く感じた出来事でした。

郷土の記憶を作品にする、不思議な出来事に出会う

(会場スクリーンに『おじょう藤九郎さま』の作品映像を投影しながら簡単な解説を入れる)はじめてえんぶりを見に行った時、雪と風がすごくて、靴の下から雪の冷たさが沁み込んできてもう痛くてジッと立ってられないほどでした。それでも最初に少し山を登って神社に行くと、まず目に入ってくるのが各えんぶり組の旗です。真っ白な世界にものすごい数の色とりどりの旗がブワーッとひしめいていて、子供のような感覚で「すげー！」と感動して、寒さなんか一気に吹き飛びました。それでこの作品では、舞台美術として舞台じゅうに旗を飾ってあるんです。

現地の方々は物心つく前からえんぶりに触れ、太夫の摺りを見えています。それが自分のお父さんである場合もあるでしょうし、唄なんて楽譜も歌詞カードなんかなくとも自然と覚えている。身体に染み付いている時間が違います。実際に太夫の動きを教わっている時に印象的だったのは、「ここって何回やるんですか」と聞くと「え？何回？ちょっと待ってください」と言って数えながら踊ってくれたりして。ようするに数なんか意識しないくらい動きが身体に染み付いているんです。なので僕たちが一朝一夕で簡単に真似できるものでは到底ないのですが、そこはあくまで「舞踏家」として踊ろうとして踊るしかありませんでした。空っぽになって踊らされる、ということですね。本当のえんぶりはちゃんと衣装も着ているんですけど、僕たちは上半身は裸にしました。頭に被っているのが烏帽子です。これは自分達で作成しました。

あと、『おじょう藤九郎さま』では扱えませんでした。『えびす舞』(注3)という面白い踊りもありました。八戸の海は鯨が来るらしいですね。鯨が来るということはその餌になる魚がいっぱいいるということだから、鯨がいれば大漁になる。だから縁起のいいものだったんです。

(注3)「(えびす舞は) 恵比寿さまが鯛を釣る様子を、子どもが釣竿と扇子を使って舞います。やっとなり上げた鯛を、家内が豊かになるよう家の旦那様に捧げて終わる、おめでたい演目です。」-「一般財団法人 VISITはちのへ」のWebサイトより引用。

最後の方のシーンになりますが、この踊りは考え方がとても面白かったです。荒谷えんぶり組だけの踊りということなんですけど、「笠づくし」と言います。これは小学生までの女の子にしか踊らせない踊りらしいです。『おじょう藤九郎さま』では大駱駝艦の30歳を超えた女性達に踊らせてしまいましたが…。何故かという、「もっとこうやって踊ろう」とか「もっと上手く踊ろう」とか考えてしまう前の子供が踊る踊りだということなんです。親方の「上手に踊ろうとしない」が、まるで自分の踊りのことを言われているみたいでした。親方の言う言葉が磨さんと共通していたりする。とても興味深かったです。僕らもついつい一生懸命良い踊りをしようと頑張ってしまった時、「力入ったねー」となってしまいますし、「上手く踊ろう」とか「ちょっと格好つけよう」とか思って作作的に嘘が入ってしまった時は良い踊りだとは言えません。「究極の技術は引きだ」

とか言いますが、親方もまたそのようなことを仰っていたこともよく覚えています。

講演趣旨と少し離れるんですが、八戸のことであと一つだけ話しをさせてもらってもよろしいでしょうか。この大変お世話になった親方とのとても不思議な話しです。荒谷に通って『おじょう藤九郎さま』を創作したのが2014年だったんですが、時をさかのぼって2012年に、東京のとある小学校の特別支援学級で作品を作ったことがありました。数ヶ月間通って、発表会のための作品を作ったんです。それでその後2014年に『おじょう藤九郎さま』があって、実はその1年後くらいに、先程からお話しに出ていた親方が山の事故で亡くなられてしまったんです。お葬式には出られませんでした。磨さんとお花を出ささせていただきました。そしてそのさらに2年後の2016年、2012年に作品を作った小学校の特別支援学級の同じ先生に「あの頃小さかった子たちが高学年になって、あまり表現活動をしたがらないのだけど、いまだに一行さんのことは覚えているからまた来てほしい」とお声をかけていただいて、また学校に通って作品を創作することになりました。最初の授業で偶然『おじょう藤九郎さま』の映像を少しだけ生徒さん達と一緒に観たんですね。そうしたら授業が終わってその担当の先生に、「一行さん、あれってえんぶりですか」と聞かれて、「はい、八戸のえんぶりです。」と答えると「私、八戸出身なんですけど、小さい頃に東京に来て」みたいな話をしてその日は別れました。そして次の授業の時なんですが、学校に行ったら先生がすぐに話しかけてくださって「一行さんのえんぶりの公演が気になったんでYouTubeで検索したら公演の映像は無かったんですけど、練習風景が見れて、そこで一行さんと叔父が話しをしていたり、一行さんが叔父から踊りを教わったりしている光景があって…」、何と亡くなられたその親方が先生の叔父様だったんです。親方のことは本当に大好きな叔父様だったということですが、遠く離れてしまって中々会うことが難しい日が続いている中で、亡くなられたことをお聞きしたということでした。「叔父さんと一行さんが一緒にいて、踊りを通じて話していて…」と、流石にその時は学校なのに先生と2人で涙を流してしまいました。何してるんだろうこの先生たち、って思われたと思いますけど。そういうような不思議な出来事もあって、『おじょう藤九郎さま』という作品は、僕にたくさんの「郷土の記憶を舞台化する」ための、あり方や関わり方を教えてくださった特別に重要な作品の一つと言えるんです。

題材をどうやって決めるか、相手も空っぽであってほしい

他にも色々な作品があるのですが、(会場スクリーンに別の作品映像を投影しながら)高知県では今までに高知市や土佐清水で合計3本の作品を作らせていただきました。1作品目は『薔薇とお接待』というお遍路さんをモチーフにした作品でした。うちの兄が歩き遍路をしたりと、少し身近に感じていたというのがあります。お遍路さんを現地の人達が「みかんでも食べていきなさい」とか親切にすることをお接待というのと、あと高知にはまだお座敷文化が残っていて、取材ということでお座敷遊びをさせていただきました。そんな色々な意味を込めて「お接待」でした。客席にジグザクの花道を組んで、その道を色々な芸をしながらお遍路している3人の旅芸者が通り過ぎて行くというような作品でした。

例えば「題材をどうやって決めるか」ということですが、高知市での2作品目の時は担当の方と一緒に題材探しから始めました。その時はまず「例えばどういったものがありますかね?」となった時に、その方が「とりあえずうちの親父が高知市立自由民権記念館の館長なので行ってみましょうか」となって「行きましょう、行きましょう」となりました。板垣退助とか、高校の時にもっと真面目に勉強しておけば良かったなあとか思いながら、お父様のお話しを聞き始めたんで

す。そうするとこれは本当に色々な方に共通することなのですが、自分が好きなこと、自分が情熱を抱えていることを話す方の話しというのはとにかく面白い。その時決定的だったのは、記念館の入口に大きい自由民権運動を代表する旗があったんですね。旗の中央に女の人がいて、そこからパーッと光が出ている。「実はあの旗、あんまり知られていないんですけどこっち側にも絵があるんですよ」と言われて「なんの絵があるんですか」と聞くと、「骸骨」だと言います。当時の人達にとっては、「自由」というものは魑魅魍魎と同じくらい得体の知れないものだったということらしいです。それを聞いた時「これじゃないですか!」と興奮してしまいました。「自由は土佐の山間より出づる」という言葉があって、土佐の山間から魑魅魍魎がこっちに迫ってくる光景がパーッと広がりました。話しは少し飛びますが、子供ってご飯の時にお箸でお茶碗をチンチンチンって叩いちゃうことありますよね。あれ何でダメかと言うと、ご飯の時間だと思った魑魅魍魎がやって来るからなんです。作中では何も知らない子供がチンチンチンとお茶碗を叩いてしまう。お母さんが「やめなさい」と止めるのだけど、子供は楽しいからまたやっちゃう。そうするとドロドロドロと得体の知れないモノ達が舞台に入り込んでくる…。2017年の『土佐の山間より出づる』という作品はそんな風に始まる作品でした。この時は高知出身の浮世絵師の、絵金の絵をモチーフにシーンを作ったりもしました。

土佐清水ではとにかくジョン万次郎との出会いが衝撃的過ぎました。最初に劇場の方に「土佐清水には万次郎がいますよ」と教えていただいたことが始まりでした。恥ずかしながらそれまでは全く万次郎のことを知らなかったのですが、調べ出したらそこからはもう完全に万次郎に心酔してしまい、それは今でも続いています。ジョン万次郎に関しては完全にライフワークとして今後も追いつけたいと思っています。万次郎の生涯のどの時代を切り取っても嘘のように面白い、というのが凄いです。人生が凄すぎるので、『ジョン万流離譚』と名付けたこの作品では、主に日本でジョン万次郎の帰りを信じて待ち続けたお母さんの目線を大事にして、「帰る」という部分を軸に作品を構成しました。14歳で漂流して11年後に帰宅した時、お母さんの第一声が「万次郎なりしか」だったと言います。その時二人の間をどんなものが満たしたのか、想像すればするほど色々な光景が浮かんでくるようです。

どんなものがどんなふう題材になるかと言うのは、自分でも本当に分からないことなんです。題材選びの時、地元の方が「これは舞踏にならないよな」みたいに気を使ってくださいることもあります。本当に空っぽで訪れた時、自分の中の何が何に反応を示すのか、というのは全く自分でも想像つかないことです。北九州に呼んでいただいて小作品を作ることがあったのですが、その時に博物館の方など色々な方が色々なことを調べてくださいました。「常盤橋という橋があって、参勤交代の時にここですわね…」とか、「小倉城もありますよ」と色々教えてくださいました。でも、どれも踊りにするというのを想定すると中々難しいと感じてしまったりして。そんな時、ふと雑談の中でその博物館の方に「専門は何なんですか」と聞いてみたら「僕は館なんです」と仰られて、「ん？ 館？」ってなるじゃないですか。「どういうことですか?」と聞くと、そこからはもう本当に生き生きと小倉にまつわる館の話しをしてくださるんです。先程も言いましたが、自分が情熱を注いでいるもの話しは、全く温度が違って感じられます。僕もどんどん引き込まれていきますし、イメージが膨らんでいきます。それこそ先日読みました凡さんの(小泉八雲の)本にもありましたけど、館買い幽霊の話しとか、どんどん話しが広がっていきます。それで「館でいきましょう!」と、館をモチーフに作品を作らせていただいたこともありました。

何が題材になるかというのは、それは人でも物でも話しでも景色でも何でもいいんですが、何

かお互いにビビッと繋がる瞬間があるんです。内浦さんの『豊橋妖怪百物語』は書店で見た瞬間に、表紙を開く前からビビビビッときましたし、何かそういうものってあるんでしょうね。磨さんが「踊り」を「をどり」と表記したりすることがありますが、「何“をとる”か」が面白いんです。

何かをいただく、という気持ち

最後に2018年から毎年、市民参加作品と言う形で作品を創作し続けている兵庫県豊岡市のお話しをさせていただきます。豊岡は城崎温泉のある兵庫県の日本海側です。豊岡も本当に色々な題材に溢れてまして、初年度の2018年は、アメノヒボコ（注4）という日本で唯一の渡来の神様を題材にした『ヒボコノコ』という作品を作らせていただきました。アメノヒボコの物語もとても面白いです。赤いたまがあってそれが女の人が変わって、その人と結婚したけどその女性は日本人だったから日本に帰ってしまう。それでその人を追って日本に渡ってくるんです。日本でも山を動かしたりとか色々なエピソードがあります。他にも鉄を持ってきたのじゃないとか、色々な角度からの見方があって大変興味深いです。

（注4）以下、「兵庫県立考古博物館」のWebサイトより引用。

「アメノヒボコは、新羅の国の王子として、奈良時代に記された古事記や日本書紀、播磨国風土記などに登場します。それぞれの書物によって若干の違いがあるものの、朝鮮半島からやってきた渡来人で、最終的には但馬に定住したというところは一致しています。（略）兵庫県内各地に伝説を残すアメノヒボコですが、歴史上の実在人物ではなく、朝鮮半島から渡ってきた渡来人たちが信仰した神様であったと考えられています。（略）そして、その伝説の中心に豊岡市の出石神社があります。また、但馬には、アメノヒボコが但馬を開拓し、豊かにしたという伝説が残されており、今も信仰の対象となっています。」

アメノヒボコは、結局日本に追ってきた人とは違う人と結婚するのですが、その3代下の子孫に「田道間守」という方がいます。2019年はその「田道間守」（注5）を題材にしました。田道間守は「お菓子の神様」としても知られています。田道間守は垂仁天皇が病気になった時に常世の国へ不老不死の実を探しに旅立ちます。でも、帰って来た時に天皇は既に崩御されていたんです。

（注5）以下、豊岡商工会議所のWebサイト「とよおかスイーツギャラリー」より引用。

「菓祖 タジマモリ（田道間守）」：「古事記」「日本書紀」に伝わるお菓子の神様。生誕地は兵庫県豊岡市とされ、中嶋神社（兵庫県豊岡市三宅）のご祭神として祀られています。『日本書紀』では「田道間守」、『古事記』では「多遲摩毛理」「多遲麻毛理」と表記されています。古代の豪族、三宅連（みやけのむらじ）の祖とされています。遠いむかし（西暦六十年頃）、タジマモリは第十一代垂仁天皇（すいにんてんのう）の命をうけ、遠い海の向こう「常世（とこよ）の国」にあるという「非時香菓（ときじくのかぐのこのみ）」を探す旅に出ました。「非時香菓」とは一年中実り、芳香を放つ果実の意味で、今の「橘（たちばな）」と言われていました。当時、日本に「非時香菓」はなく、食べると歳をとらずに長生きができると考えられていました。タジマモリは幾多の困難を乗り越え、十年の歳月をかけてやっと「非時香菓」を見つけました。大喜びで非時香菓を持ち帰りましたが、その一年ほど前に天皇は亡くなっておりました。持ち帰った非時香菓の半分は皇太后に献上され、残りの半分を天皇のお墓に植えた後、タジマモリは悲しみのあまり亡くなったと伝えられています。

そしてその亡骸の前で『叫（おら）び哭（な）きて自ら死（まか）れり』、とあって、田道間守は叫んで自殺してしまいます。タイトルを付ける時に「自ら死（まか）れり」だとちょっと悲し過ぎると思ったので、そこを『香（か）を唄（うた）ふ』に変えました。泣き叫んでその香りを唄ったとして、最終的に『叫び哭きて香を唄ふ（おらびなきてかをうたふ）』という題名にして作品を創作しました。橘は冬でも葉を落とさないとか、柑橘系の実の香りはなかなか消えにくいとか、それで

不老不死の実だとされたということもあるみたいです。田道間守を祀っている中嶋神社をお参りした時、そこに橘の木が植えられていて、その側に行った時、田道間守が持ち帰った「非時香果」の匂いを感じたんです。その香りは決して消えることなく今もずっと豊岡の町の中を彷徨っていると確かに感じたんですね。そう考えると、田道間守が旅した異界の大冒険を空想するよりも、現代の豊岡に未だ香り続けている匂い、そのことに注目する方が自分にとってはイメージが膨らみ、リアリティがあったんです。作品の終わり方としては、匂いや思いは生き続けているので、死ぬという選択肢は取りませんでした。最後に舞台の前の方で、その時は橘ではなくて柑橘系の大きな実だったんですけど、それを思いっきり叫んでからグシャッと握り潰したんです。そうするとその匂いって強烈で、劇場中にその匂いがブワッと広がっていく。物語の世界と現実が繋がる瞬間というのはすごいロマンを感じますよね。あと「アゲハ蝶の鱗粉は常世の匂いがする」とか妄想して。海の彼方にある「常世の国」にある不老不死の実、橘ですね。その橘の木にいつもいる芋虫は成虫すると美しいアゲハ蝶になる。だからアゲハ蝶からは常世の匂いがするはずだ、とか想像してモチーフにいただいたりもしました。

直近(2022年)では豊岡の出石出身の沢庵和尚を題材に『舞踏但馬風土記 幽暗ノ章 水に浮いたひょうたん』という作品を創作しました。沢庵和尚の生涯も色々調べはしたんですが、実際に軸としたモチーフは沢庵和尚の書いた『不動智神妙録』という剣術書でした。その中で「水の上に浮いた瓢(ひさご)」について書かれている部分がありました。「水に浮いたひょうたん」ということです。チョンとそれを押せば、ひょうたんはひょいと脇に逃げて行く。そしてまた押せばまた逃げる…。禅僧であり、剣術の達人でもある沢庵和尚のその言葉と自分の踊りとが繋がるんです。「沢庵和尚は舞踏の話しをしているのか?」、と思うような衝撃を受けました。そもそも『不動智神妙録』の「心とらわれるな」という教えは、今日僕がずっと言っている大駱駝艦の「空っぽ」ということととても通じるんです。えんぶりの親方、沢庵和尚、そして磨さんの考えが、歩いている道は違えども同じ終着点に向かっている。だからこそそこには物事の普遍的な本質があるのだと強く感じた次第です。この作品ではその「水に浮いたひょうたん」というフレーズだけで90分の作品に膨らんでいきました。

様々な事例を話し出すとキリがないんですけど、これまでにこのようにたくさんのモノを「いただいて」きました。僕にとって踊りはいつも「田村一行がこんなことを表現します!」ではないんです。いつも「皆様よろしくお願いたします」と町を歩かせていただいて、ポツと誰かが言う一言とか、ちょっと立ち寄ったお寺にまつわるお話だったり、偶然見かけた景色とか、そういう所からあくまで「いただく」ものなんです。そういうものと出会うため、自分はいつでも空っぽであることを心がけます。自分は何者でなくてもいい、でも周りのものに作られた自分というものがある。その自分とまた新しい何かが出会って、その結果今まで出会ったことのないような踊りに導いてくれる。だからこそ、今の自分があるのは、今まで出会った全ての方のおかげなんです。そう考えるとやっぱり死ぬまで適当な踊りはできないですね。

話したいことはまだまだたくさんあるんですけど、こうやって色々な所で作品を作らせていただいているというわけです。ありがとうございました。

主な作品

- 2002年6月「雑踏のリベルタン」会場：大駱駝艦壺中天(東京)
- 2008年3月「血」会場：大駱駝艦壺中天(東京)
- 2008年9月「血」会場：シアターブラッツ江坂(大阪)
- 2009年12月「血」会場：オルレアン国立劇場(フランス・オルレアン)
- 2010年5月「オママゴト」会場：大駱駝艦壺中天(東京)
- 2011年3月「血」会場：イムズホール(福岡県福岡市)
- 2011年11月「オママゴト」会場：パリ日本文化会館(フランス・パリ)
- 2012年3月「血～特別編」会場：豊川市御津文化会館ハートフルホール(愛知県豊川市)
- 2013年1月「はざま」共演：赤石太鼓保存会 会場：川根本町文化会館(静岡県川根本町)
- 2013年7月「風のしわざ」会場：朝倉市総合市民センターピーポート甘木(福岡県朝倉市)
- 2013年8月 P K T「田村一行のとんずら」*小学3～6年生出演 会場：調布市せんがわ劇場(東京)
- 2013年9月「血～八戸特別編」会場：八戸市南郷文化ホール(青森県八戸市)
- 2013年9月「オママゴト～特別編」会場：北九州芸術劇場(福岡県北九州市)
- 2014年1月～2月「又」会場：大駱駝艦壺中天(東京)
- 2014年3月「風のすきま」会場：多可町文化会館ベルディーホール(兵庫県多可町)
- 2014年3月「風が吹いたんだい」会場：豊川市御津文化会館ハートフルホール(愛知県豊川市)
- 2014年3月「どっ」共演：赤石太鼓保存会 会場：川根本町文化会館(静岡県川根本町)
- 2014年10月「おじょう藤九郎さま」会場：八戸市南郷文化ホール(青森県八戸市)
- 2014年11月「遣召烏胡賊臣」会場：うきは市文化会館白壁ホール(福岡県うきは市)
- 2014年12月「おじょう藤九郎さま」会場：大駱駝艦壺中天(東京)
- 2015年1月「薔薇とお接待」会場：高知市文化プラザかるぼーと(高知県高知市)
- 2015年10月「赤色の花嫁」*市民参加作品 会場：ながす未来館(熊本県長洲町)
- 2016年2月「狩人と冬の鬼」共演：赤石太鼓保存会 会場：川根本町文化会館(静岡県川根本町)
- 2016年8月「はだかの王様」会場：あうるすぽっと(東京)
- 2016年11月「カラリ手を引く真紅の子」会場：飯山市文化交流館なちゅら(長野県飯山市)
- 2017年1月「さても薫風のせい」*市民参加作品 会場：八尾市文化会館プリズムホール(大阪府八尾市)
- 2017年2月「土佐の山間より出づる」*市民参加作品 会場：高知市文化プラザかるぼーと(高知県高知市)
- 2017年12月「存在と時間」会場：くにたち市民芸術小ホール(東京都国立市)
- 2018年1月「ヒボコノコ」*市民参加作品 会場：豊岡市民プラザ(兵庫県豊岡市)
- 2018年6月「みだらな蛙」会場：大駱駝艦壺中天(東京)
- 2018年9月 P K T「#存在の証明」*小学3～6年生出演 会場：立川市市民会館 たましん R I S U R Uホール(東京都立川市)
- 2018年11月「おじょう藤九郎さま」会場：八戸市南郷文化ホール(青森県八戸市)
- 2019年2月「叫び哭きて香を唄ふ」*市民参加作品 会場：豊岡市民プラザ(兵庫県豊岡市)
- 2019年8月 現代舞踊フェスティバル「同じ釜の飯を食う」*一般公募ダンサー出演 会場：メルパルクホールTOKYO(東京)

【第1部 基調講演】私を踊りへと誘うもの～『舞踏風土記シリーズ』の創作

- 2019年11月 三島由紀夫文学館 開館20周年記念フォーラム「ハグクミ申ス者－三島由紀夫に捧ぐ－」会場：山中湖文学の森 情報創造館（山梨）
- 2019年12月 「彼方を語る人」会場：川根本町文化会館（静岡県川根本町）
- 2020年1月 「リュウグウノツカイ」*市民参加作品 会場：豊岡市民プラザ（兵庫県豊岡市）
- 2020年2月 「ノキシタノマロウド」会場：豊岡市民プラザ（兵庫県豊岡市）
- 2020年11月 東アジア文化都市2020北九州〈詩、踊る〉「深きより」会場：北九州芸術劇場（福岡県北九州市）
- 2020年11月 「ヒメゴトキンギョ」会場：ながす未来館（熊本県長洲町）
- 2021年3月 「ジョン万流離譚」会場：土佐清水市立市民文化会館くろしおホール（高知県土佐清水市）
- 2021年3月 「舞踏但馬風土記 赫ノ章 日槍拾遺譚」*市民参加作品 会場：豊岡市民プラザ（兵庫県豊岡市）
- 2021年3月 「舞踏但馬風土記 蒼ノ章 異界の末裔」*市民参加作品 会場：豊岡市民プラザ（兵庫県豊岡市）
- 2021年10月 「私家版 浪漫歷程」会場：くにたち市民芸術小ホール（東京都国立市）
- 2021年11月 「舞踏 豊橋妖怪百物語」*市民参加作品 会場：穂の国とよはし芸術劇場P L A T（愛知県豊橋市）
- 2022年1月 「宮古仄聞記」会場：宮古市民文化会館（岩手県宮古市）
- 2022年2月 「舞踏但馬風土記 幽暗ノ章 水に浮いたひょうたん」*市民参加作品 会場：豊岡市民プラザ（兵庫県豊岡市）
- 2022年10月 「泉大津風土記 穴師樹影譚」*市民参加作品 会場：あすとホール（大阪府泉大津市）
- 2022年10月 「舞踏 天狗藝術論」会場：シアタートラム（東京）
- 2022年12月 「舞踏酒田風土記 幽玄の論理」*市民参加作品 会場：希望ホール（山形県酒田市）
- 2023年2月 「舞踏但馬風土記 但馬夜話蒐集録」*市民参加作品 会場：豊岡市民プラザ（兵庫県豊岡市）